新旧友人への友人関係期待が友人関係に及ぼす影響

The Influence of Friendships to Role Expectation in New and Old Friends

渡　辺　　舞

【問題】

⑴　青年期の友人関係

青年期に友人関係を持つことの重要性にはどのようなことが考えられるであろうか。宮下（1995）は青年にとって友人の意味という観点から次のような3点を指摘している。まず第1に自分の不安や悩みを打ち明けることにより情緒的な安定感が得られること、第2に、自己を客観的に見つめることができるということ、第3に人間関係が学べるということである。すなわち友人関係では対等な関係であるが故に、楽しいことだけでなく、辛いことやトラブルを避けることはできない。しかしながらそのような状況を経験することで人間として、していいことと悪いこと、人に対する思いやりや配慮の心を学べるという点に重要な意味が存在するといえる。その一方で、現代の友人関係には特徴的な傾向があることも先行研究から指摘されている。岡田（1993･1995）は、青年期の友人関係には互いの内面を開示することなく、傷つけないように接し、表面的で円滑な関係を築く傾向があることを指摘し、表面的な面白さを志向する「群れ関係群」・友人に気を使いながら接する「気遣い関係群」・深い関わり合いをさける「関係回避群」があることを示した。この結果は時代が移り行く中で友人関係のありかたが変化し、希薄化している傾向があることを示しているといえよう。しかしながら岡田（1999）によると現代青年は現実ではこのような希薄な関係を持ちながら、表面的な関係を肯定しているわけでなく、友人との内面的な関係を求めていることを示し、現代の特徴とされている関係性に現代青年が満足しているわけではないことを指摘している。

⑵　大学進学時の友人関係

青年期の中で高校を卒業する際には様々な進路の選択肢がある。大学進学や就職では生活環境にも大きな変化が生じ、友人関係にも影響を与える可能性がある。小嶋（1998）は中学・高校への進学とは違い、高校から大学への進学については、「新しい学生生活への移行」ばかりでなく、大学生活でもさまざまな出会い・経験・カリキュラムを通しての「新しい価値観への移行」、また卒業を控え就職・進学への「社会人への移行」へと環境的枠組みのなかでさまざまな選択が強いられることを指摘している。そのため本邦でも、大学入学時の学校適応の重要性を論じ、適応に関わる要因を検討した先行研究（諸井、1986；水子・寺嵜・金光、1998；東・浅川・古川・吉田、2002）は多く、友人関係と適応の関係に注目した研究も数多く存在する。南・山口（1992）は大学入学という環境移行期において

キーワード：友人関係期待、大学生、新旧友人

新しい環境にあった対人ネットワークを再構成することは、新しい環境での生活を適応的に過ごす上で重要であることを指摘している。一方で、大学進学時には、その新しく形成される友人関係への注目が向けられる研究が多いが、それ以前の友人関係の影響を指摘する研究もある。和田（2001）は大学入学時の友人形成の検討の際に古くからの友人（旧友人）と新しい友人（新友人）とのかかわりのありようを検討し、入学6ヶ月後に行った調査の結果では旧友人の方が新友人より親密であることを示した。さらに多川（2006）は女子短大生を対象とし、新旧友人のとの関わりを、大学入学年の5月時点と9月時点の2回の調査で検討している。その結果、夏休み直後の調査においても旧友人との行動的な親密度は高く、少なくとも入学後6ヶ月程度では、友人関係で旧友人との関係の影響が強いことがうかがえる。以上のことからも、新しく形成される友人関係を検討する際に、環境移行時の個人の生活状況を考慮すること、また入学以前に形成されてきた友人関係を考慮した上での検討が必要だと考えられる。

⑶　新友人と旧友人における「友人関係期待」

先の議論に見られるように青年期の友人関係は重要な対人関係であることが明らかにされている一方で、現代青年には特徴的な友人関係があることも概観してきた。では、現代の青年は友人関係において、相手に対してどのような期待があるのだろうか。和田(1993)は友人に対する期待として友人関係に望むもの10項目（表1参照）を取り上げ、性差の観点から検討している。その結果、女性よりも男性が「共行動（共に行動すること）」を同性友人関係に望み、「相互依存」と「自己開示」の領域では男性よりも女性が望んでいることを明らかにした。また、男女ともに言いたいことが言い合える「真正さ」の領域、「協力」すること、相手を「尊重」することを望んでおり、これらの期待が青年期の友人関係では重視される側面であることがうかがえる。中学生・高校生・大学生を対象とした調査（和田、1996）では、「自己向上」「真正さ」は大学生で重視され、「共行動」は中学生でその期待が高いことが示されている。この結果について和田は青年期の友人関係の特徴について、児童期の「生活の友」の関係から「心の友」に変化していることを示すものだと考察している。さらに和田（2001）は上記と同じ方略を使用し、大学1・2先生を対象とした調査において、大学に入学してから知り合った友人（以下新友人とする）と大学に入学する前に知り合った友人（以下旧友人とする。）の2名に対し10項目を評価させている。その結果、新友人に対しては、旧友人よりも「情報」「協力」「共行動」を重視し、旧友人は新友人よりも「自己向上」「真正さ」「自己開示」を重視していることを明らかにした。新旧友人には付き合い期間の差異があり親密さの程

表1．友人関係期待10領域の項目内容

1	互いに協力し合える。困ったとき助けてくれる。	協力
2	話題が豊富で楽しい。自分の知らないことを教えてくれる。	情報
3	趣味や好みが一致している。性格が似ている。	類似
4	いろいろな面で刺激を与えてくれる。自分を向上させてくれる。	自己向上
5	よく気がつく。自分の気持ちを察してくれる。	敏感さ
6	何かにつけ、一緒に行動できる。いつも一緒にいる。	共行動
7	言いたいことが言い合える。利害関係なく付き合える。	真正さ
8	悩みをうちあけることができる。何でも話してくれる。	自己開示
9	自分を必要としてくれる。互いの個性を尊重しあえる。	尊重
10	互いに役に立つことができる。甘えられる。	相互依存

度にも差異がある。身近な存在で、付き合い期間の浅い新友人に対しては、情報をくれることや自分との類似点を期待し、付き合いの長い旧友人にはより深い関係を期待していること、故に旧友人と新友人は相補的な機能を持っていることを明らかにした。以上の結果は、親密さの程度や付き合いの長さによって友人に対する期待に差異があることを示した結果ともいえる。

⑷ 友人関係に親密化過程における友人関係期待

友人関係の親密化過程の代表的な理論には段階理論と初期分化現象（Berg、1984；Hays、1985；Berg&Clark、1986；中村、1989；山中、1994）があげられるが、友人への役割期待を取り扱った先行研究には、段階理論の立場をとる研究が多い。段階理論はAltman&Taylor（1973）の社会的浸透理論やLevinger&Snock（1972）の5段階モデル等様々なモデルが存在するが、共通点は、親密化の進展に伴い、段階を設定しその段階ごとに質的に異なる相互作用や行動がとられることを仮定していることが特徴である。本邦では下斗米（1996・1999・2000）が、友人関係における親密段階によって役割行動の遂行に関する差異を検討している。その結果、親密化していく過程においてそれぞれの時期ごとに固有の課題が存在し、解決するための各役割行動度の期待度が変化すること（下斗米、1999）、顔見知り段階・友達段階に比べ、親友段階では、既存の役割行動を適切に遂行することが相対的に重要視されること、またそれぞれの段階において葛藤原因として顕在化されやすい役割行動と顕在化されにくい役割行動が存在することを明らかにしている（下斗米、2000）。これらの結果から、友人に対する役割行動は発達段階だけでなく、協力者と対象者の親密度の差異が影響している可能性があることがうかがえる。

【目的】

以上の議論を踏まえ、本研究における目的は以下の3点である

①新友人と旧友人に対する「友人関係期待」の差異と構造を明らかにすることである。和田（2001）では大学1、2年生を対象とした調査を行っているが、本研究では大学1年生に限定し、その検討を行う。またその得点の差異の検討だけではなく、新旧友人における関係期待の構造も検討する。

②新友人および旧友人に対する「友人関係期待」が友人への各評定に及ぼす影響を明らかにすることである。具体的には友人関係に期待するものが、友人に対する親密さ・対人感情・関係認知・対人行動の側面に影響するかを検討することである。

③新友人および旧友人に対する「友人関係期待」がその後の友人関係に及ぼす影響を明らかにすることである。本研究では、大学入学7ヶ月後と入学1年1ヶ月後の2回の調査を実施する。その際に最も親しい友人を選択させる方略をとる。前調査で回答した「友人関係期待」が、次調査での友人選択を予測するのかを検討することである。

【方法】

⑴ 調査協力者及び調査日時

札幌市内の大学生に対し、質問紙調査を行った。調査日時は2006年11月と2007年5月の2回行い、両調査に参加した167名（男性44名・女性123名）のみ分析対象とした。第1回目（2006年11月）調査時点の平均年齢は18.76歳（SD＝.71）第2回目（2007年5月）調査時点の平均年齢は19.29歳（SD＝.62）だった。

⑵　質問紙の構成

①基本的属性および住居状況：年齢の記入と学籍番号・性別・住居状況を選択させた。

②同性友人のイニシャルの記入：

ａ）「新友人」として大学に入学してから知り合った人で一番親しい同性友人を、ｂ）「旧友人」として大学に入学する前に知り合った人で一番親しい同性友人を想起するように教示した上で、それぞれのイニシャルを記入させた。また、2回目の調査では、前回想定した友人と同じ人物を想起したかを確認するために「１．同じ人物」「２．違う人物」「３．覚えていない」の3項目から当てはまるものを選択させた。

③選択友人との関係項目

「友人と出会った場所」「知り合ってからの期間」「友人との接触頻度」「電話やメールで接触頻度」について、新旧友人別に当てはまる項目を選択させた。また旧友人に対してのみ「旧友人の現在の生活状況」について当てはまる項目を選択させた。

④関係の親密さの測定

関係の親密を測定する尺度として山中(1994)の指標を使用した。この指標は3項目から成り立っており、ａ）好意度（どの程度好感を持っているか）ｂ）関係関与度（どの程度深く関わっているか）ｃ）関係のラベリング（どの程度親しいか）についてそれぞれ7段階で評定させた。尚、関係ラベリングの評定尺度上には「顔見知り＝1点」、「会えば話す関係＝3点」、「ある程度親しい友人＝5点」、「非常に親しい友人＝7点」の関係のラベルを示した。

⑤対人感情の測定

津村・大坊・林・今川（1985）の対人感情項目18項目のうち、大学生の友人関係における対人感情項目として適すると判断した16項目を使用した。削除した項目は「負い目を感じる」「恐れ多い」の2項目である。新友人・旧友人のそれぞれに対して、項目に示した感情をどの程度感じているかを7段階で評定させた。

⑥二者関係認知の測定

林・今川・津村・大坊（1984）の二者関係認知項目30項目のうち、調査協力者の回答の負担を考慮して、各因子で因子負荷量が高く、かつ大学生の友人関係における関係認知項目として適すると判断した14項目を抜粋して使用した。新友人・旧友人とそれぞれについて、関係性を示す特性語とその対語を両極とした、7段階の尺度評定上で評定させた。

⑦対人行動の測定

今川・津村・大坊・林（1984）の対人行動55項目のうち、調査協力者の回答の負担を考慮して、各因子から大学生の友人関係における対人行動項目として適すると判断した24項目を抜粋して使用した。新友人・旧友人のそれぞれに対して、項目に示した行動をどの程度行うかを5段階で評定させた。

⑧友人関係期待（1回目調査時点のみ回答）：

和田（1993）による同性の友人関係に望むもの10領域（協力、情報、類似、自己向上、敏感さ、共行動、真正さ、自己開示、尊重、相互依存）を使用し、新旧友人との関係について、それぞれもっとも重要だと思う領域を1位に、以下10位まで順位をつけさせた。「友人関係期待」10項目を重要度の高い順に順位をつけてもらった。

なお、質問紙の構成として、付き合い期間が長く友人に対する評価・イメージが定着していると考えられる旧友人の評定が、知り合ってからの期間がまだ浅い新友人に対する評定に影響することを考慮して、まず、新友人に関して各項目に回答してもらった後、旧友人に関して回答してもらった。

【結果】

(1)　親密度得点の算出と「対人感情」「関係認知」「対人行動」の因子構造の検討

(1)-1　親密度得点の算出

山中（1994）の関係の親密さ3項目の評定平均値を新旧友人別および調査時点別に算出し、親密度得点とした。

(1)-2　「対人感情」・「関係認知」・「対人行動」の因子構造の検討と下位尺度得点

親しい友人に対する「対人感情」・「関係認知」・「対人行動」のそれぞれの因子構造の検討するために、新友人と旧友人の各調査時点の評定（4評定分）の平均値を算出し、各「対人感情」・「関係認知」・「対人行動」の尺度別に因子分析を行った。

(1)-2-1　対人感情

対人感情尺度16項目に対して主因子法による因子分析を行った。共通性の値が低い「義理を感じる」を削除した上で、主因子法・Promax回転による因子分析を行い、固有値の減衰状況から2因子解を採用した。回転前の2因子で15項目の全分散を説明する割合は56.06%であった。第1因子は、「励ましたい」、「やさしくしたい」など10項目で構成され、友人に対し前向きでポジティブな感情に関する内容であることから「ポジティブ感情」因子、第2因子は「反発を感じる」、「軽べつを感じる」など5項目で構成され、友人に対して距離感を持ち拒否感を示す感情に関する内容であることから、「拒否感情」因子と命名した。第1因子「ポジティブ感情」はα＝.911、第2因子「拒否感情」はα＝.800であり、ほぼ十分な信頼性を示した。また因子間相関は－.255であった（表2参照）。

(1)-2-2　関係認知

関係認知尺度14項目に対して主因子法による因子分析を行った。共通性の値が低い「単純な－複雑な」を削除した上で、主因子法・Promax回転による因子分析を行い、2因子に負荷の高い「3深い－浅い」を除き、固有値の減衰状況から2因子解を採用した。尚、回転前の2因子で12項目の全分散を説明する割合は70.33%であった。第1因子は「敵対的－友好的」、「安定した－不安定な」など10項目で構成され、友人との関係を親密であるかの程度を示す内容であることから、「親密な関係」因子、第2因子は「感情的な－理性的な」、「冷静な－情熱的な」の2項目であり友人との関係において感情の程度を示す内容であることから「感情的関係」因子と命名した。第1因子「親密な関係」はα＝.949、第2因子「感情的関係」はα＝.586であった。また、両因子間相関は.389であった（表3参照）。

表2．親しい友人に対する対人感情の因子構造

		1	2
9	励ましたい	.813	.091
2	やさしくしたい	.778	－.173
15	好き	.759	－.113
11	信頼できる	.749	－.247
12	かわいい	.735	.025
6	尊敬したい	.734	－.015
5	甘えたい	.727	.279
13	助けて欲しい	.697	.390
1	親しみを感じる	.681	－.325
8	一体感がもてる	.669	.023
4	反発を感じる	.105	.904
10	軽べつを感じる	.018	.796
3	こわい	.041	.685
7	優越感を感じる	－.051	.641
14	負けたくない	－.010	.477
因子寄与		5.60	3.34
信頼係数（α）		.911	.800
因子間相関			－.255

(1)-2-3　対人行動

対人行動尺度24項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況から3因子解を採用し、因子負荷量の低い「妥協する」および2因子に負荷

表３．親しい友人に対する関係認知の因子構造

		1	2
2	対等な ── 対等ではない	−.923	.167
5	敵対的な ── 友好的な	.904	−.163
14	緊張に満ちた ── リラックスした	.852	.078
10	快的な ── 不快な	−.833	.069
12	安定した ── 不安定な	−.827	−.011
1	協同的な ── 競争的な	−.826	.084
8	気楽な ── 落ち着かない	−.775	−.027
13	上下関係のある ── 上下関係のない	.749	.131
7	誠意に満ちた ── 偽りのある	−.727	.141
4	永続的な ── 一時的な	−.675	.059
11	感情的な ── 理性的な	−.124	.767
6	冷静な ── 情熱的な	−.123	−.513
因子寄与		6.78	1.98
信頼係数（α）		.949	.586
因子間相関			.389

量が高い「自分のために利用する」「軽蔑する」を除く22項目での解釈を採用した。尚、回転前の3因子で21項目の全分散を説明する割合は60.77％であった。第1因子は、「親切にする」「協力する」など10項目で構成され、友人に対する行動として友好や親密さを示す行動を示す内容であることから、「親和的行動」因子、第2因子は「忠告する」、「反抗する」など8項目で構成され、友人に対する行動として直接に拒否や支配する行動を示す内容であることから「主張的行動」因子、第3因子は「避ける」、「無視する」など3項目で構成され、友人に対する行動として、距離をとり、回避する行動を示す内容であることから「回避的行動」因子と命名した。第1因子「親和的行動」はα＝.868、第2因子「主張的行動」はα＝.871、第3因子「回避的行動」はα＝.865、であり、ほぼ十分な信頼性を示した。なお、第1因子と第2因子の因子相関は.207、第1因子と第3因子の因子相関は−.257、第2因子と第3因子の因子相関は.487であった（表4参照）。

「対人感情」2因子、「関係認知」2因子、「対人行動」3因子についてそれぞれの因子の項目数に違いがあるため、新旧友人別に項目の評定平均値を算出し、各下位尺度得点として以下の分析で使用することとした。また、関係認知の尺度得点に関しては、得点の高い方向がより「親密な関係」であること、「感情的な関係」であることを示すようにするために項目No.1、2、4、7、8、10、11、12（表3参照）を逆転項目として処理し扱った。

⑵　新旧友人に対する「友人関係期待」の差異

友人関係期待における各領域で、新旧友人に対する期待の順位に差が見られるかを検討するために、各領域別に符号検定を行った（表5参照）。その結果、「共行動（Z＝−3.86、p＜.001）」では新友人への期待が旧友人よりも有意に高かった。一方、「真正さ（Z＝−2.62、p＜.01）」・「自己開示（Z＝−2.91、p＜.01）」・「尊重（Z＝−2.39、p＜.05）」では旧友人への期待が新友人よりも有意に高かった。よって「共行動」では新友人の、「真正さ」「自己開示」「尊重」では旧友人の期待が高いことが示された。

⑶　新旧友人に対する「友人関係期待」の布置による構造の検討

友人関係期待10領域における新旧友人へ

表４．親しい友人に対する対人行動の因子構造

		1	2	3
17	親切にする	.885	−.190	.078
9	協力する	.840	−.096	−.076
3	頼りにする	.831	−.132	.152
19	助けをもとめる	.756	.147	.101
24	援助する	.691	.093	.133
23	うちとける	.637	.094	−.337
8	仲良くする	.628	−.078	−.346
11	甘える	.599	.108	.106
1	謝る	.473	.082	.221
16	一緒に遊ぶ	.446	.203	−.130
12	忠告する	.107	.856	−.223
13	反抗する	−.108	.740	.145
20	指導する	.133	.699	−.019
4	命令する	−.111	.695	.106
21	意地をはる	−.023	.690	.027
5	不平を言う	−.041	.614	−.024
2	自慢する	.173	.599	.039
15	服従する	−.015	.441	.280
22	避ける	.105	−.047	.917
14	無視する	.068	.030	.910
6	他人行儀にふるまう	−.004	.165	.621
因子寄与		5.230	4.950	3.971
信頼係数（α）		.868	.871	.865
因子間相関		I	II	III
	I		.207	−.257
	II			.487

表５．新旧友人の友人関係期待 10 領域の順位

	協力	情報	類似	自己向上	敏感さ	共行動	真正さ	自己開示	尊重	相互依存
旧友人＜新友人：順位	52	60	59	67	71	45	81	86	78	58
新友人＜旧友人：順位	64	70	66	63	65	91	50	51	50	57
同順位	51	37	42	36	31	31	36	30	39	52
符号検定（Ｚ値）	−1.02	−0.79	−0.54	−0.26	−0.43	−3.86	−2.62	−2.90	−2.39	0.00
Ｐ値	.307	.430	.592	.792	.668	.000	.009	.004	.017	1.000

の認知構造を検討するために、多次元尺度法（ALSCAL）を使用した。はじめに、10 領域の各領域間における順位差の絶対値を算出し、調査協力者別に距離行列を作成し分析に使用した。新旧友人とも解釈可能性を考慮し、２次元解釈を採用した。適合度指標は新友人では R^2＝.28・Stress＝.34、旧友人では R^2＝.29・Stress＝.31 であった。新旧友人との関係期待の各領域の布置を図１・２に示す。新旧友人への関係期待において「情報と類似」、「敏感さと自己向上」がいずれの友人についても近い位置に布置され、共通した認知構造であることが明らかになった。また新友人では「情報・類似・協力」「真正さ・共行動・自己開示」「自己向上・敏感さ」が近くに布置されているが、旧友人の布置は新友人に比べ、単独項目での布置が多かった。

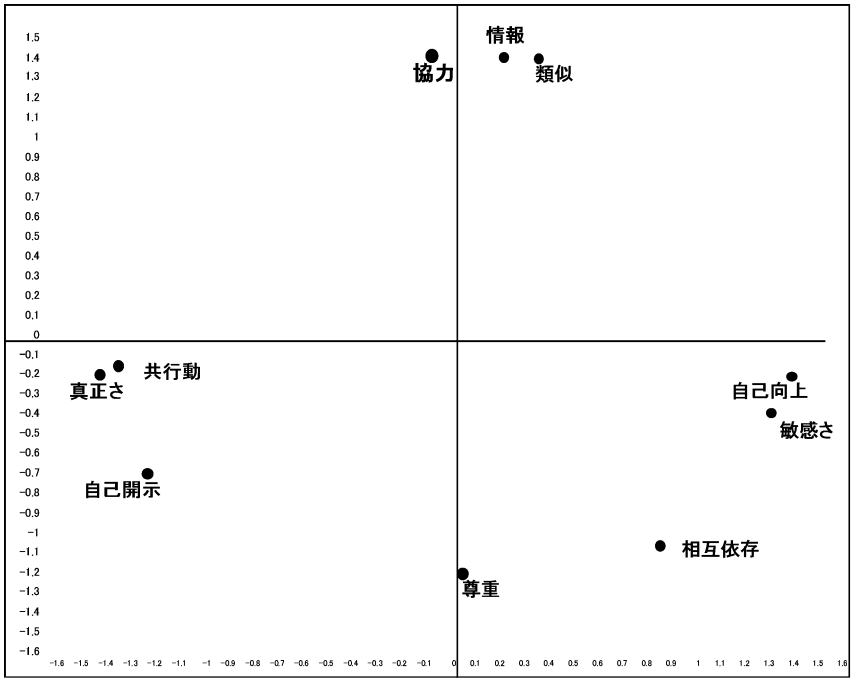

図１．新友人に対する友人関係期待の布置

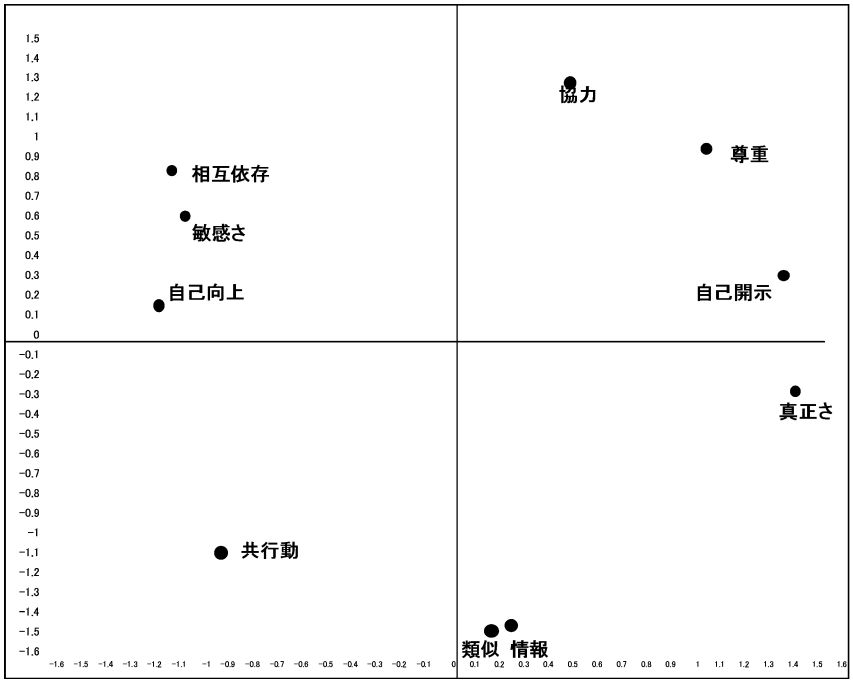

図２．旧友人に対する友人関係期待の布置

⑷ 新旧友人に対する「友人関係期待」が友人に対する評定に及ぼす影響

新旧友人の関係期待のうち、どの関係期待が各友人への親密度得点・対人感情・関係認知・対人行動の各指標に影響を与えるかを検討するために、はじめに1回目（2006年11月：入学7ヶ月後）における新旧友人への友人関係期待10項目の順位づけを各領域項目別に「1位～3位」を期待高群、「4位～7位」を期待中位群、「8位～10位」を期待低群に再カテゴリ化をした。

次に新旧友人の友人関係期待の10項目（期待高・期待中・期待低群）を説明変数、1回目調査時点の友人関係の各指標（8変数）を基準変数とする数量化Ⅰ類を行った。なお、各変数別および新旧友人別に分析を行った。

分析手順は関係期待項目を全部投入した後、偏相関係数の低い項目とカテゴリ群の重み数量に偏りのある項目を削除し、再分析を行った。最終的には重相関係数（説明率）の減少も考慮し最終的に投入する説明変数を決定した。説明変数を全投入した初期の段階で、強い偏相関変数を得られなかった評定および重相関係数の低い評定に関しては、再分析を行わなかったため本研究での結果の記載を割愛する。

⑷-1 新友人に対する「友人関係期待」が友人に対する評定に及ぼす影響

各評定の重相関係数はR＝.276～.476であり、説明率は必ずしも高いとは言えなかった。「感情的関係」については初期の投入時に低い重相関係数であったため、再分析を行っていない。以下各評定別に偏相関係数.250以上のものについて結果を記す（表6参照）。

親密度得点では、情報（偏相関係数：.340）、類似（.286）、共行動（.325）、相互依存（.261）の影響の大きさが確認された。いずれの変数も、各期待が中程度である場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高い場合負の値を示し、情報、類似では低い場合にも負の値を示していた。

ポジティブ感情では自己開示（.335）の影響の大きさが確認された。期待が高い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が低い場合が負の値を示していた。

拒否感情では、共行動（.262）の影響の大きさが確認された。期待が高い場合カテゴリ数量が正の値に、期待中程度の場合負の値を示していた。

親密な関係では、相互依存（.302）の影響の大きさが確認された。期待が低い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高い場合、負の値を示していた。

親和的行動では情報（.379）の影響の大きさが確認された。期待が中程度である場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高い場合負の値を示していた。

主張的行動と回避的行動では相互依存（主張：.276・回避：.351）の影響の強さが確認された。期待が高い場合カテゴリ数量が正の値に、期待度が低い場合負の値を示していた。

⑷-2 旧友人に対する「友人関係期待」が友人に対する評定に及ぼす影響

各評定の重相関係数はR＝.360～.492であり、説明率は必ずしも高いとは言えなかった。「親密度」「主張的行動」「回避的行動」については初期の投入時に強い影響を示す偏相関係数が見られなかったため、再分析を行っていない。以下各評定別に偏相関係数.250以上のものについて結果を記す（表7参照）。

ポジティブ感情では情報（.277）、真正さ（.255）の影響大きさが確認された。期待が低い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高いおよび中程度の場合負の値を示していた。

拒否感情では真正さ（.266）影響大きさが確認された。期待が低い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が中程度の場合負の値を示していた。

表６．新友人役割期待が友人関係の各指標に及ぼす影響の重み数量

		親密度	ポジティブ感情	拒否感情	親密な関係	感情的関係	親和的行動	主張的行動	回避的行動
協力		(.174)	(.186)	－	(.133)	(.164)	(.137)	－	(.223)
	高	－.205	.210	－	－.196	.050	－.025	－	－.083
	中	.217	－.080	－	.128	.098	.086	－	.150
	低	－.003	－.452	－	.238	－.513	－.210	－	－.233
情報		(.340)	(.161)	(.133)	(.205)	(.116)	(.379)	(.037)	(.222)
	高	－.565	－.254	.107	－.404	.099	－.365	.022	.064
	中	.362	.188	－.170	.149	.093	.275	.022	.087
	低	.080	.006	.142	.249	－.266	.003	－.032	－.214
類似		(.286)	(.135)	(.191)	(.193)	(.131)	(.124)	(.075)	(.135)
	高	－.253	.111	－.265	－.340	.221	－.022	－.061	－.082
	中	.486	.120	.025	.197	－.051	.129	.045	.113
	低	－.143	－.222	.267	.204	－.197	－.084	.029	－.006
自己向上		(.242)	(.089)	－	(.130)	(.185)	(.061)	(.114)	－
	高	－.483	.130	－	－.321	.379	－.008	.077	－
	中	.245	.049	－	.085	.041	.015	－.081	－
	低	.000	－.133	－	.092	－.270	.030	.047	－
敏感さ		(.186)	(.225)	(.128)	(.116)	(.100)	(.137)	(.074)	(.168)
	高	－.373	.476	－.176	－.278	－.007	－.070	.086	－.108
	中	.186	－.057	－.053	.016	.114	.098	－.013	.108
	低	－.043	－.219	.193	.154	－.168	－.103	－.036	－.095
共行動		(.325)	(.153)	(.262)	(.115)	(.151)	(.219)	(.184)	－
	高	－.263	.210	.288	－.198	.270	－.036	.152	－
	中	.481	.034	－.382	.008	－.081	.188	－.112	－
	低	－.287	－.252	.139	.193	－.183	－.176	－.028	－
真正さ		(.169)	－	(.173)	(.219)	(.106)	(.161)	－	(.179)
	高	－.266	－	.007	－.409	.006	－.130	－	－.102
	中	.238	－	－.170	.178	.123	.134	－	.141
	低	.070	－	.331	.469	－.262	－.008	－	－.078
自己開示		－	(.335)	(.127)	－	(.248)	(.163)	(.141)	(.117)
	高	－	.570	－.167	－	.461	.140	.087	－.076
	中	－	－.154	.010	－	－.111	－.019	－.117	.088
	低	－	－.473	.178	－	－.398	－.137	.034	－.013
尊重		(.146)	(.146)	(.148)	(.200)	(.078)	－	(.070)	(.201)
	高	－.249	.267	－.147	－.431	.007	－	.068	－.061
	中	.138	－.130	－.065	.038	.055	－	－.028	.133
	低	.041	－.069	.263	.396	－.166	－	－.027	－.154
相互依存		(.261)	－	(.124)	(.302)	(.109)	(.171)	(.276)	(.351)
	高	－.742	－	－.039	－.957	.248	－.293	.503	.567
	中	.105	－	－.169	－.089	.102	.102	－.073	.022
	低	.071	－	.137	.259	－.128	－.020	－.045	－.131
重相関係数		.463	.475	.349	.345	.276	.476	.369	.465
（２乗）		(.214)	(.225)	(.122)	(.119)	(.076)	(.227)	(.136)	(.216)

（　）は偏相関係数

表７．旧友人役割期待が友人関係の各指標に及ぼす影響の重み数量

		親密度	ポジティブ感情	拒否感情	親密な関係	感情的関係	親和的行動	主張的行動	回避的行動
協力		(.038)	(.162)	−	(.153)	(.248)	(.138)	(.056)	(.098)
	高	.036	−.006	−	−.156	−.275	.038	−.015	.001
	中	−.011	.105	−	.015	.265	.032	.026	.024
	低	−.056	−.491	−	.386	−.472	−.266	−.080	−.121
情報		(.202)	(.277)	(.095)	(.205)	(.064)	(.164)	(.012)	(.176)
	高	.115	−.182	.150	−.188	−.188	.066	−.005	−.119
	中	−.181	−.208	−.079	−.088	.042	−.119	.008	.080
	低	.189	.479	−.001	.295	.042	.131	−.008	−.027
類似		(.070)	(.133)	(.095)	(.222)	(.204)	−	(.156)	(.156)
	高	.046	−.104	.149	−.206	.038	−	.102	−.072
	中	−.076	−.107	−.065	−.112	.239	−	.035	.089
	低	.046	.209	−.054	.303	−.302	−	−.127	−.038
自己向上		(.156)	(.136)	(.099)	(.260)	(.289)	(.131)	(.106)	(.150)
	高	−.255	−.199	.025	−.298	−.656	−.012	.113	−.131
	中	.039	−.068	−.102	−.119	.306	−.089	−.068	.057
	低	.120	.219	.113	.350	.051	.120	.011	.015
敏感さ		(.121)	(.195)	(.134)	(.143)	(.182)	(.114)	(.130)	(.068)
	高	−.044	−.150	.253	−.244	−.287	.081	.158	.061
	中	−.081	−.161	−.092	−.002	.215	−.078	−.026	−.001
	低	.149	.250	−.006	.143	−.161	.073	.051	−.033
共行動		(.037)	(.104)	(.209)	(.300)	−	(.011)	(.095)	(.134)
	高	−.044	−.118	.454	−.541	−	−.007	.115	.101
	中	−.031	−.146	−.069	−.135	−	.013	.005	.049
	低	.032	.119	−.110	.251	−	−.005	−.040	−.060
真正さ		(.141)	(.255)	(.267)	(.213)	(.178)	(.285)	(.168)	(.122)
	高	−.010	−.162	.005	−.220	−.197	−.120	.002	−.554
	中	−.107	−.154	−.255	.203	.144	−.014	−.094	.032
	低	.300	.700	.609	.269	.336	.453	.221	.111
自己開示		(.176)	(.065)	(.247)	−	(.109)	(.254)	(.139)	(.134)
	高	.094	.068	−.070	−	−.105	.192	.086	−.045
	中	.043	−.019	−.169	−	.172	−.174	−.118	−.006
	低	−.353	−.142	.572	−	−.102	−.130	.032	.136
尊重		(.189)	(.085)	−	−	(.107)	(.105)	(.099)	(.099)
	高	.148	.071	−	−	−.136	.079	−.030	−.044
	中	−.016	−.121	−	−	.149	−.073	.080	.003
	低	−.280	.057	−	−	.032	−.040	−.072	.086
相互依存		(.081)	−	(.137)	(.220)	(.107)	(.151)	(.230)	(.101)
	高	−.036	−	.323	−.521	−.017	.186	.327	.107
	中	−.088	−	−.056	−.016	.170	.072	−.025	−.385
	低	.060	−	−.054	.147	−.092	−.090	−.721	−.006
重相関係数		.429	.472	.432	.393	.356	.492	.373	.404
（２乗）		(.184)	(.223)	(.186)	(.154)	(.127)	(.242)	(.139)	(.163)

（　）は偏相関係数

親密な関係では、共行動(.300)、自己向上(.260)の影響の大きさが確認された。期待が低い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高い場合負の値を示していた。

感情的関係では自己向上（.289）の影響の大きさが確認された。期待が中程度の場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高い場合負の値の値を示していた。

親和的行動では真正さ（.285）自己開示(.254)の影響大きさが確認された。真正さでは期待が低い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が高い場合負の値を示していた。自己開示では、期待が高い場合カテゴリ数量が正の値に、期待が中程度および低い場合負の値を示していた。

⑸　新旧友人に対する「友人関係期待」が友人選択に及ぼす影響

新旧友人の関係期待のうちどの関係期待が半年後の友人選択（同じ友人を選択・違う友人を選択）を予測するかを検討するために、新旧友人に対する友人関係期待の再カテゴリ群（期待高・期待中・期待低群）を説明変数、１回目調査時点～２回目調査時点（2007年５月：入学１年１ヶ月後）における友人選択(同じ友人を選択・違う友人を選択）を基準変数とする数量化Ⅱ類を行った。調査時点間の友人選択状況を表８・９に示す。新友人の選択では調査時点間で一番親しい友人について同じ人物を選択した協力者が97名（58.8%）、違う人物を選択した協力者が68名（41.2%）だった。旧友人の選択では調査時点間で一番親しい友人について同じ人物を選択した協力者が126名(76.4%)、違う人物を選択した協力者が39名（23.64%）だった。尚、数量化Ⅱ類は新旧友人別に分析を行った。

⑸-1　新友人に対する「友人関係期待」が友人選択に及ぼす影響

正準相関係数は.511、判別的中率：70.3%であった。新友人の友人選択の重心を示す判別関数は同じ友人の選択は.427、違う友人の選択は－.608であった。新友人の友人選択に及ぼす要因として強い影響力を示した友人関係期待はいずれも旧友人への期待の項目であった（図３参照)。旧友人への「敏感さ（重み係数の範囲＝2.455)」「相互依存（2.168)」「自己向上(2.090)」の影響が大きくいずれの項目においても、これらの項目への期待が高い群の重み係数が負の値を示し、低い群の重み係数が正の値を示している。よって旧友人に対するこれらの関係期待を高く持っている場合に新友人を半年後の選択時に変化させ、これらの関係期待が低い場合には半年後の選択で同じ友人を選択する傾向が示された。

表８．調査時点間における新友人の選択状況

	新友人の選択状況 同人物	違う人物	
男性	19 (44.19)	24 (55.81)	43
女性	78 (63.93)	44 (36.07)	122
	97 (58.79)	68 (41.21)	165

人数(%)

表９．調査時点間における旧友人の選択状況

	旧友人の選択状況 同人物	違う人物	
男性	31 (72.09)	12 (27.91)	43
女性	95 (77.87)	27 (22.13)	122
	126 (76.36)	39 (23.64)	165

人数(%)

⑸-2　旧友人に対する「友人関係期待」が友人選択に及ぼす影響

正準相関係数は.522、判別的中率：72.1%であった。旧友人の友人選択の重心を示す判

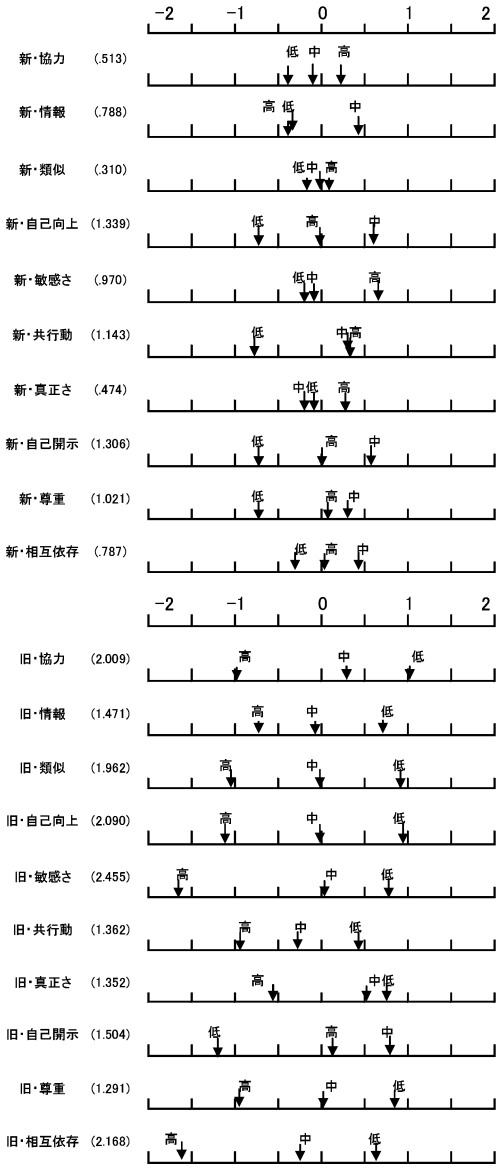

図３．新友人の友人選択に及ぼす友人関係期待の影響要因

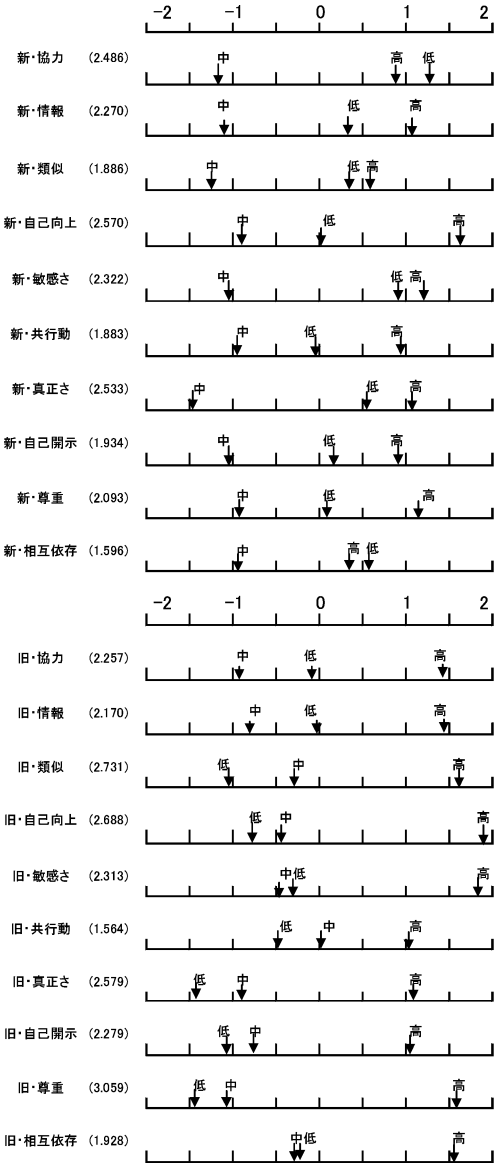

図４．旧友人の友人選択に及ぼす友人関係期待の影響要因

別関数は同じ友人の選択は.280、違う友人の選択は－.936 であった。

旧友人の友人選択に及ぼす影響では、新友人の選択に比べて、新旧友人の多くの関係期待項目でその強い影響力が示された（図４参照)。新友人への関係期待項目では、「協力(2.486)」「情報(2.270)」「自己向上(2.570)」「敏感さ（2.322)」「真正さ（2.322)」「尊重(2.092)」の強い影響力が示され、いずれの項目においてもこれらの項目への期待が高い群の重み数量が正の値を示し、中群の重み係数が負の値をしている。よって新友人に対するこれらの関係期待を高く持っている場合には半年後に同じ友人を選択し、これらの関係期待が中程度の場合には旧友人を変化させた。旧友人への関係期待項目では、「協力(2.257)」

「情報（2.170）」「類似（2.731）」「自己向上（2.688）」「敏感さ（2.313）」「真正さ（2.579）」「自己開示（2.279）」「尊重（3.059）」の強い影響力が示された。これらの項目の期待が高い群の重み係数が正の値を示し、中・低群の重み係数が負の値を示している。よって、旧友人に対するこれらの関係期待を高くもっている場合には、半年後に同じ友人を選択し、これらの関係期待が中程度および低い場合には、旧友人を変化させることが示された。

【考察】

⑴ 親しい友人に対する「対人感情」「関係認知」「対人行動」の構造

「対人感情」では「ポジティブ感情」・「拒否感情」の2因子が見出された。津村ら（1985）のsignificant othersに限定した因子構造の検討では、対人感情の構造として4因子を抽出しているが、津村らの「一体感・信頼」「保護・情愛」は本研究のポジティブ感情に、「畏怖・尊敬・負い目」うち「尊敬したい」のみポジティブ感情に、「畏怖・尊敬・負い目」「優越感・反感」のその他の項目は本研究の「拒否感情」に集約された。津村らの研究でもsignificant othersに限定した構造の検討であったが、対象は家族、いとこ、大学の先生、先輩・後輩、同性の友人、および異性の友人・恋人といった異性や上下関係が存在する本研究よりも幅広い対象に対する結果である。本研究では、同性の最も親しい新友人と旧友人に対する評定のみであり、対象人物の範囲は極めて狭く、感情の構造も分化されなかったものと考えられる。例えば、甘えたい、かわいいといった「保護・情愛」の感情や負い目を感じる、尊敬したいといった「畏怖・尊敬・負い目」の感情は先生との関係、両親との関係、先輩後輩関係といった上下関係が存在する場合に分化する感情であると考えられる。同性友人関係の特徴のひとつはお互いの立場の「対等性」であるため（遠矢、1996）、これらの感情は分化されず、友人に対して「ポジティブ」な感情を示す程度と、友人に対して「拒否」の感情を示す程度に統合されたものと考えられる。

「関係認知」では「親密な関係」・「感情的関係」の2因子が見出された。林ら（1984）は、社会の中で想定しうる様々な対人関係の関係認知を検討するために、夫と妻、医者と患者、看守と囚人など全部で60の二者関係を取り上げた二者関係認知の構造として5因子を抽出している。林らの「緊密―表面」「気楽―緊張」「上下―対等」「協調―競合」的関係は本研究の「親密な関係」因子に集約され、「公的・課題志向―私的情緒」的関係が本研究の「感情的関係」因子に相当する。本研究では調査協力者の回答への負担を考え、各因子の因子負荷が高い項目を抜粋し、また林らの研究で使用された特性語が20年以上前に使用されたものであることから現代の大学生が友人関係との関係認知として回答に適すると判断した項目のみ14項目を使用している。そのため、同じ因子構造が得られなかったと考えられる。さらに、林らの先行研究では、あらゆる対人関係を想定した上での「関係認知」構造であり、本研究の同性の親しい友人に限定した場合には「緊密―表面」「気楽―緊張」「上下―対等」「協調―競合」といった認知の分化はなされず集約されたものと考えられる。林・今川・津村・大坊（1985）はsignificant othersに限定した「関係認知」構造の検討も行っているが、その結果、「気楽―緊張」関係は抽出されなかった。林らはこの考察として、一般的な対人関係では自分にとって「内」側の関係と「外」側の関係認知が存在するが、significant othersに対象を限定した場合、「内」の中のみの関係であるためこの因子が抽出されなかったと報告している。本研究の結果もこの報告を支持するもので、同性の最も親しい新友人と旧友人に対する極めて限定さ

れた対象との関係認知の評定であったため、「親密さ」の程度を示す因子に多くに項目が集約されたものと考えられる。一方で感情の程度を示す関係認知は、親しい友人に対する関係認知であっても、「親しさ」の程度を示す次元とは独立のものとして抽出された。両因子間には中程度の正の因子間相関（.389）が見出されていることから、「親密さ」の程度の認知を反映しつつも「感情的」な程度の認知は区別されていることを示している。

「対人行動」では「親和的行動」・「主張的行動」・「回避的行動」の3因子が見出された。今川ら（1984）は一般的行動55項目について9因子を抽出しているが、本研究では、対等な大学生の友人関係で行動が生起しないと思われる「礼儀」の因子項目を削除し、8因子の中から代表的な24項目を選び使用した。その結果、今川らの「親和」「依存」「友好」は本研究の「親和的行動」に集約された。また今川らの「敵対」は本研究の「主張的行動」に、「服従」は本研究の「回避的行動」に相当するが、その他の「優越」「支配」「拒否」は、項目によって本研究の「主張的行動」と「回避的行動」に項目によってそれぞれ組み込まれる結果となった。「主張的行動」と「回避的行動」には中程度の正の因子間相関（.487）が見出されているが、項目内容を比較すると、「主張的行動」は忠告する、反抗するなど直接的で積極的な関わりを、「回避的行動」は無視する、避けるなど、友人との距離を保つ消極的な関わりを示す行動と捉えられる。両因子とも親しい友人に対する行動項目として、否定的、拒否的側面を反映しつつも、積極的な関わりをもつ行動か、消極的な関わりをもつ行動が親しい友人との付き合いに中では別次元の側面として分化したものと考えられる。また「関係認知」同様に項目を抜粋（55項目→24項目）していることも、先行研究と同じ構造が得られなかった要因として考えられる。

⑵ 新旧友人に対する「友人関係期待」の差異と構造

本研究では新旧友人に対する友人関係期待の差異を期待順位の差異と布置構造の観点から検討を行った。本研究で使用した友人関係項目は和田（1993・1996・2001）と同じであるが、和田は関係期待10項目について1対ごとに提示しそのいずれを重要と考えるかを選択させ、得点化する方略を使用している。一方本研究では、調査協力者の回答への負担を考慮し、10項目を提示した上で、新友人・旧友人についてそれぞれ重要だと思う順に1位から10位まで順位付けをしてもらった。その順位付けにおける新旧友人の差異を検討したところ、同じ生活環境で時間を共有することの多い新友人に対しては、「一緒に行動すること」が、一方で出会ってからの期間が長く、深い信頼関係が築かれていると考えられる旧友人に対しては、新友人に比べて、「自己開示すること」、「言いたいことが言い合える関係」「自分を必要としてくれる」などの関係を重視していることが明らかになった。この結果は新友人には日常生活で頼りになる存在としての期待があり、旧友人に対してはより内面を重視する深い関係を期待していることがうかがえる結果である。和田（2001）の結果と比較すると、すべての項目ではないが、「共行動」「真正さ」「自己開示」では、同様の結果を得た。評定の方法に差異はあったとしても、新旧友人の関係期待の差異を示し、和田の結果を一部支持するものである。

さらに本研究では、多次元尺度法を使用し、その布置から新旧友人の関係期待の構造も明らかにした。各領域への期待の順位が近ければ、その領域同士が近い位置に布置されている。新旧友人ともに「情報と類似」「敏感さと自己向上」は近くに布置され、親しい友人に対する共通した認知構造が得られた。また新友人では、「協力」が「情報と類似」と、「共行動」が「自己開示と真正さ」と近い位置に

布置されたが、旧友人の「協力」や「共行動」の布置は、他の領域とは単独の位置に布置された。この差異は、付き合い方の差異であるためと考えられる。「協力」や「共行動」が付き合い頻度等、生活環境の共有度に関連する期待であるため新友人の場合他の領域と近い認知構造が得られたものと考えられる。旧友人の場合には、大学に入学以前よりも付き合い頻度に変化が生じている可能性があり、「協力」や「共行動」の期待項目が別の認知構造として布置された可能性がある。また、旧友人への関係期待 10 項目の布置は、新友人と比べて、項目間の距離が大きかった。関係期待項目 10 領域は、いずれも親しい友人に対する期待としては、重要なものである。旧友人は新友人よりも付き合いが長く深い関係を築いている。旧友人の場合、付き合いの深さ故に、各協力者は友人に対して関係期待の差異を明確に認知し、期待の個人差も大きいと想像される。そのため期待項目がそれぞれ別の次元として認知され布置された可能性がある。しかしながら、新友人、旧友人ともに適合度指標は低い値しか得られなかったことからも、認知構造に関しては、評定方法・分析方法を工夫した上での再検討が必要であると考える。

⑶ 新旧友人に対する「友人関係期待」が友人関係に及ぼす影響

新旧友人への各関係期待が、友人関係の「親密さの程度」「対人感情」「関係認知」「対人行動」の各評定得点に及ぼす影響を検討したが、全体的傾向として旧友人よりも新友人の方が各評定に対する影響を示す関係期待項目が多いことが示された。この結果が示すことは、新友人は協力者にとって、身近にいてくれる、日々多くの時間を共有する付き合いの友人であるため、友人に対する期待と評定が関連した可能性がある。一方で、旧友人は大学入学以後、引き続き同様の付き合いを続けている者、生活環境が変化し、入学以前と付き合い方が変化したものなど多様な付き合い方があるため、影響が強く示されなかった可能性がある。各関係期待が友人への各評定に及ぼす影響においても、新旧友人では影響する項目に差異がみられた。新友人では「相互依存」期待が多くの変数に影響を与えているが、旧友人では「真正さ」の期待の影響が大きいことが示され、これらの結果からも新旧友人での関係の期待度と実際の評定の影響の仕方に差異があることが示された。ただし、新旧友人とも各指標に対する説明率が低く、関係期待以外の要因が各指標に影響を与えている可能性がある。また和田（1993）の項目は友人関係に期待する具体的な内容であったが、本研究で評価の側面として使用した「対人感情」「関係認知」「対人行動」はより一般的な対人関係に適用可能な項目群であった。そのためその影響をうまく説明しなかった可能性もある。よってこれらの影響関係を明らかにするためには今後の検討が必要である。

次に、新旧友人への関係期待が、半年後の友人選択を予測するかの検討を行った。その結果、半年後の新友人の選択において旧友人への関係期待の影響力が強いことが示され、また新友人への期待は友人選択に影響をあたえる要因として寄与しなかった。新友人との付き合いはまだ 1 年程度であり、浅い関係であることが推定され、一方で旧友人とは少なくとも 1 年以上の付き合いのある深い関係である。この結果は、和田（2001）が指摘しているように、古くからの友人関係のあり方が新しく形成される友人関係に影響を与えることを示すものであり、旧友人への関係期待が、新しく形成される友人を選択する際の判断基準として協力者の認知の中に存在することを示すものである。

旧友人への関係期待の多くの項目でその強い影響力が示され、順位が高い場合には同じ友人を選択することが明らかになった。また

新友人への期待項目でも旧友人の友人選択に影響を与えることを示し、旧友人の選択については、新旧友人関係の相互の影響を示す結果となった。また新友人への関係期待が中程度の場合に友人を変化させる結果を得た。新友人への関係期待において、中程度の期待を持っていることが友人選択を変化させる要因となったことを示すものだが、この結果については今後のさらなる検討が必要であると考える。

【まとめと今後の課題】

本研究では青年期友人関係に対する期待が友人関係に及ぼす影響を大学進学時の１年生に対し縦断的に検討を行った。第１に、新旧友人の関係期待には差異があることが示された。第２に友人関係期待が友人関係に及ぼす影響を検討してきたが、新友人への関係期待は半年後の友人選択には寄与しないが、同友人への評価には影響を与えていた。一方で、旧友人への関係期待は同友人への評価の影響は少ないが、新友人・旧友人への友人選択を予測する要因として多くの期待項目が寄与することが明らかになった。以下に今後の課題を記す。

第１に、青年期の友人関係には性差があることが確認されている（和田、1993）が、本研究では、協力者の人数の偏りがあったため、検討できなかった。しかしながら調査時点間における新友人の選択状況では、男性の方が友人を変化させる傾向があり、性によって友人関係のあり方に差異がある可能性は否定できない。今後は性差も含めた検討が必要である。

第２に本研究では、協力者の回答への負担に考慮し、関係期待項目について１位～10 位の順位をつけてもらう方略を使用した。このため関係期待項目の絶対的な評価とはならず、また項目間の相関関係が否定できない。また多次元尺度法や数量化理論における検討では、いずれも説明率が低く、その方略における限界が生じた。今後は評定方法に工夫をしたうえでの再検討が必要である。

付記

本研究の一部は北海道心理学会第 54 回大会および第 55 回大会にて発表された。本論文をまとめるにあたり、熱心なご指導・多くのご助言をいただきました今川民雄教授に厚く感謝申し上げます。また調査にご協力いただきました北星学園大学の調査協力者の皆様にも心から御礼申し上げます。

引用文献

Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). Social penetration: The development of interpersonal relationships.

東紀美子・浅川潔司・古川雅文・吉田幸世（2002）。女子青年の大学適応に関する研究　神戸女子文学部紀要、35、161-179。

Berg, J. H. (1984). Development of friendship between roommates. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 346-356.

Berg, J. H., & Clark, M. S. (1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: gradually evolving or quickly apperent? In. J. Derlega&B. A. Winstead (Eds) Friendship and social interaction, New York: Springer-Verlag, 101-128.

林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫（1984）。対人的オリエンテーションの研究(2) ── 二者関係認知の構造について ──　日本心理学会第 48 回大会発表論文集、662。

林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫（1985）。対人的オリエンテーションの研究(5) ── Significant others に対する関係認知の構造について ──　日本心理学会第 49 回大会発表論文集、269。

Hays, R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. Journal of Personality and Social Psychology, 48, 909-924.

今川民雄・津村俊充・大坊郁夫・林文俊（1984）。対人的オリエンテーションの研究(3)――対人行動の構造について――　日本心理学会第48回大会発表論文集、663。

小嶋明子（1998）。高校から大学へ　会沢勲・石川悦子・小嶋明子（編著）　移行期の心理学――こころと社会のライフイベント――　ブレーン出版　pp 115-146。

Levinger, G & Snoek, D. J (1972). Attraction in relationships: A new look at interpersonal attraction. General Learning Press.（和田実(1999)。出会いのコミュニケーション　諸井克英・中村雅彦（共著）　親しさが伝わるコミュニケーション――出会い・深まり・別れ――　金子書房　pp 8-13。

南博文・山口修司（1992）。大学生活への移行　山本多喜司・S.ワップナー（編著）　人生移行の発達心理学　北大路書房　pp 179-204。

宮下一博（1995）。青年期の同世代関係　落合良行・楠見孝（編）講座生涯発達心理学第4巻　自己への問い直し：青年期　金子書房　pp 155-184。

水子学・寺嵜正治・金光義弘（1998）。日常生活における対人相互作用と感情との関連――大学新入生の適応に関する追跡調査――　川崎医療福祉学会誌、8、65-72。

諸井克英(1986)。大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感　実験社会心理学研究、25、115-125。

中村雅彦(1989)。大学生の友人関係の発展過程に関する研究（Ⅰ）――関係性の初期分化に関する検討――　日本グループダイナミックス学会第37大会発表論文集、65-66。

岡田努（1993）。現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究、5、43-55。

岡田努（1995）。現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究、43、354-363。

岡田努(1999)。現代大学生の友人関係と自己意識の関連について　教育心理学研究、47、432-439。

下斗米淳(1996)。「対人関係の親密化」研究の展望：理論的枠組みの検討　専修人文論集、58、23-49。

下斗米淳(1999)。対人関係の親密化過程における役割行動期待の変化に関する研究専修人文論集、64、1-32。

下斗米淳（2000）。友人関係の親密過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究――役割期待と遂行とのズレからの検討――　実験社会心理学研究、40、1-15。

多川則子(2006)。友人関係に対する行動的な親密度と役割行動期待遂行の影響　日本社会心理学会第47回大会論文集、pp 696-697。

遠矢幸子（1996）。友人関係の特性と展開　大坊郁夫・奥田秀宇（編）対人行動学研究シリーズ3　親密な対人関係の科学　誠信書房　pp 89-116。

津村俊充・大坊郁夫・林文俊・今川民雄（1985）。対人的オリエンテーションの研究(8)――Significant others に対する関係認知を対人感情の対応関係について――　日本心理学会第49回大会発表論文集、272。

和田実(1993)。同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異　社会心理学研究、8、67-75。

和田実（1996）。同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連　心理学研究、67、232-237。

和田実(2001)。性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響　心理学研究、72、186-194。

山中一英(1994)。対人関係の親密化過程における関係性の初期分化に関する検討　実験社会心理学研究、34、105-115。